

蓋付コンテナ垂下による淡水真珠母貝の殻長2cm稚貝生産条件の検討

久米弘人・草野 充（滋賀県水産課）・井戸本純一・孝橋賢一

1. 目的

省力的な生産手法の蓋付コンテナ垂下による稚貝生産は、堅田内湖において有効であることが確認されているが、生産した稚貝のサイズは養殖業者が必要とする殻長2cmに達していない。そこで、堅田内湖において殻長2cm以上の稚貝生産を目的に、蓋付コンテナ(以下コンテナ)の形状および収容密度を変えて生産試験を行った。

2. 方法

育成に用いた蓋付コンテナ(幅45cm×奥行29.5cm×高さ15.8cm 容量19.5L)は、側面に直径6mmの通水孔を計30個あけた形状の「従来型」、蓋を育成期間途中で3mm目のネットに変更する「細目型」、同時期に従来型の蓋を1cm目のネットに変更する「荒目型」、従来型の通水孔の間に同径の通水孔を追加した「多孔型」(通水孔合計56個)、従来型の通水孔を直径9mmにした「大穴型」の5形状とした。脱離稚貝の収容数は、従来型、細目型、荒目型では、100個、300個、600個、1000個の4区分とし、多孔型、大穴型は1000個区のみとした。すべてのコンテナに市販の細砂を5mmの厚さで敷いた。令和6年6月3日と5日に、脱離稚貝を収容し、収容して3か月後に、細目型と荒目型の蓋をネットに交換した。収容して5か月後にすべてのコンテナを取り上げて稚貝の個数と殻長を測定した。

3. 結果

生残率は、100個区で高い傾向があったものの、どの区もおおむね10~30%の範囲となった(図1)。生産した稚貝のサイズは、収容数を少なくするほど大きくなる傾向であった(図2)。平均殻長が2cmを超えたのは、細目型の100個区と300個区、荒目型の全区、大

穴型(1000個区のみ)であった。荒目型においては、平均殻長が3.5~4.3cmで殻長2cmを大きく超え、最大殻長は6.9cmであった。

荒目型では、殻長2cm以上の生産率(殻長2cm以上稚貝数/全稚貝数×100)は、全区で90%を超え、1コンテナあたりの殻長2cm以上の平均生産数は、600個区で166個と最も多くなった(図3)。

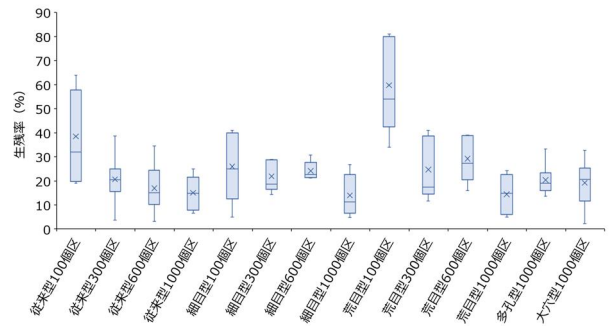


図1 コンテナ飼育期間中の生残率

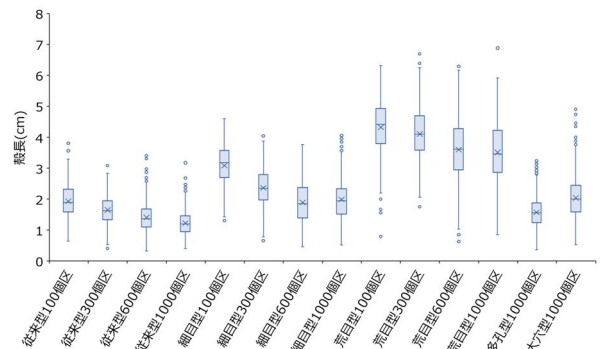


図2 コンテナ飼育で生産した稚貝のサイズ

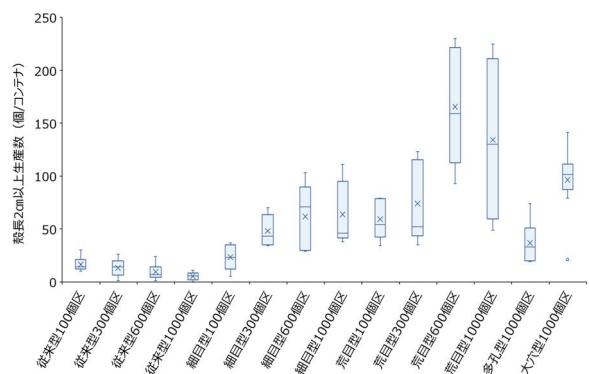


図3 殻長2cm以上の生産数